

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



置かれた状況で常に能動的に動き、  
自らを鍛え上げる

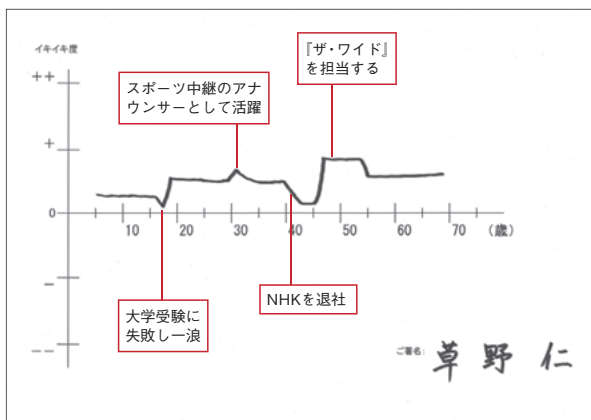
**草野 仁氏** Kusano Hitoshi

TVキャスター

## Career History

### 草野仁氏の キャリアヒストリー

1944年	0歳	満州・新京生まれ。長崎県島原市で育つ。父は数学者で長崎大学名誉教授の草野萬三郎氏。幼少時から運動神経抜群で勉強は嫌いだった
1959年	15歳	長崎県立島原高等学校に進学。陸上部で活躍したが、父の意向で2年生時に退部
1963年	19歳	東京大学文学部社会学科に入学。勉学に励み、社会心理学者の故辻村明氏から薫陶を受ける
1967年	23歳	NHK入社。アナウンサーとして鹿児島放送局に配属後、福岡放送局を経て大阪放送局に赴任
1976年	32歳	モントリオールオリンピックでNHK史上最年少アナウンサーとして中継を担当。翌年に東京アナウンス室に配属され、スポーツ番組やニュース番組で活躍する
1985年	41歳	NHKを退職。フリーのTVキャスターとなる
1993年	49歳	生放送情報番組『ザ・ワイド』（日本テレビ）の司会を担当。人気番組へと成長させる
2015年	71歳	『世界ふしぎ発見!』（TBS）、『主治医が見つかる診療所』（テレビ東京）など5本のレギュラー番組を持つほか、バラエティ番組にも出演。誠実な人柄で多くの視聴者に支持されている



直筆の人生グラフ。「起伏のゆるやかな人生」と草野氏。陸上をやめて東京大学を受験するも失敗し、一浪したことが最初の挫折。

番組開始時から司会を務める『世界ふしぎ発見!』が2015年4月で30年目を迎えた草野仁氏。穏やかな人柄と冷静沈着な司会ぶりに定評があり、これまでに多くの長寿番組で長く司会を務めてきた。フリーのキャスターとして厳しい世界に生きる草野氏が、70歳を超えてなおテレビの第一線で活躍している秘訣は何だろう。

### 負け知らずだったスポーツの 世界を離れ、勉学に励んだ学生時代

草野氏の父は長崎大学の教授で数学者、母は音楽教師だった。一家は戦後満州から無一文で長崎に引き揚げ、生活再建のために両親は必死で働いた。

「両親が共働きなのをいいことに、放課後は日が暮れるまで友だちと遊びました。父から勉強するように言われても聞かず、ゲンコツがよく飛んできました」

運動神経抜群で、中学時代は陸上の100メートル走と走り幅跳びの2種目で常に長崎県のトップクラス。高校入学後は陸上部に入り、全国大会の決勝を目指したが、2年生の夏に、父が独断で退部届を出してしまった。

「一方的に『お前は精神的な強さがなく、スポーツマンとして大成しない。腰を据えて勉強しろ』と言われたのです。当然反発しましたが、父は学生時代に砲丸投げで全国優勝したスポーツマンでしたので、言葉に説得力がありました。何より、常日ごろ勤勉で公正な父の姿を見ていましたから、反論の余地がなかった。最終的には父の言葉に従って東京大学を目指しましたが、簡単には気持ちが切り替えられず、現役では不合格でした」

それまでスポーツでは負け知らずだった草野氏にとって初めての挫折であり、大きな敗北感を味わった。だが、生来の負けず嫌いな性格が幸いして猛勉強し、翌年には合格。入学後は社会学を学んだ。

### NHKに入社。第4志望の アナウンス部門で頭角を現す

大学3年、4年のときには、当時新進気鋭の社会学の研究者だった辻村明教授にゼミで指導を受けた。

「辻村先生は得意のロシア語を武器に、当時の大学で理想化されがちだったソビエト連邦社会を現地の新聞の内容分析から批判的に論じるといった、独自の研究をしていました。研究対象もイデオロギーのような問題から、東京と大阪での人の歩く速さの違いといった地域文化ま

で、自分の問題意識に基づいて枠を設けず取り組んでいましてね。その姿勢に影響を受け、私も物事を主体的に判断する目を持って生きていきたいと、ジャーナリストを目指すようになりました」

卒業後は取材記者を志望してNHKに入社。ところが、配属されたのはアナウンス部門だった。

「まさかと驚きました。私は長崎出身で標準語に自信がありませんでしたし、人前で話すのが得意でもない。それに、当時の私にはアナウンサーは用意された原稿を読む受動的な仕事にしか見えませんでした。正直なところ、やりがいを感じられなかったのです」

それでも選択肢はほかになく、与えられた仕事で勝負していかなければならない。初赴任先の鹿児島で現場に身を置きながら、アナウンサーとしていちばん能動的な仕事は何かと考えたとき、思い当たったのがスポーツ実況だ。

「スポーツ実況はアナウンサーが取材をし、表現もします。おまけに自分が大好きな分野でもある。ここで頑張って一番になろうと決め、スポーツ実況の仕事には片っ端から手を挙げました」

事前に綿密な下調べをして準備万端で番組本番に臨み、視聴者が少ない競技であっても、わかりやすい実況を心がけた。その姿勢が認められたのだろう。入社10年目にはNHKアナウンサー史上最年少でオリンピックの中継を担当し、翌年には東京アナウンス室に配属。草野氏はスポーツアナウンサーとして名を知られる存在になっていった。

### フリー初の担当番組の視聴率が低迷。 もがきながら、報道の本質に気づいた

18年間勤務したNHKを退職し、フリーに転じたのは、より能動的に仕事をしたいという思いからだった。

「当時のNHKではアナウンサーが番組の企画にかかわることができませんでした。そこに限界を感じました」

TBSの情報番組『朝のホットライン』の司会に抜擢され、フリーとして意気揚々とスタートを切った。だが、視聴率は思うように伸びず、苦闘したという。

「同じ時間帯の大ヒット番組『ズームイン!!朝!』に水を

あけられ、民放で万年2位のまま5年半で番組が終了。それはもう悔しかったですね。民放では情報を正確に伝えるのはもちろん、わかりにくいことはよりわかりやすく、明るい話題はより楽しく伝える工夫が求められます。独立当時の私はそこが中途半端だったのです」

苦い経験を活かし、1993年から司会を務めた情報番組『ザ・ワイド』では視聴者が求める情報は何かをスタッフとともに考え抜き、その情報を提供するための取材を徹底。他番組にはない情報を発信して高視聴率番組に成長させ、約15年間続いた。同番組がとくに実績を残したのはオウム真理教による一連のサリン事件の報道だ。「独自に米国から生物化学兵器の専門家を招き、すべての放送局の中で先んじてサリンとオウム真理教の関連性を立証する報道ができたことが私たちの勝因でした」

サリン事件は多くの番組が報道していたが、どの番組も生物化学兵器としてのサリンの情報は薄く、事件の核心に迫れずにいたなかでの快挙だった。

「視聴者が知りたい本物の情報を届けることが大事だと確信しました。すべての放送は視聴者のためにあります。現在も司会を務める『世界ふしぎ発見!』においても同

じです。歴史上の出来事と現在のつながりを描くといったこの番組ならではの切り口を大切にすることにより、単なる歴史の紹介に終わらず、視聴者が求める鮮度の高い情報を伝えることを目指してきました」

目指すは「生涯現役」。「今後はスポーツ界の往年のスーパースターに、現役を引退した今だからこそ話せることや、技術の神髄を聞くインタビュー番組をやってみたいですね」と話す。その表情が何とも楽しそうなのだ。経験豊富な草野氏のこと。取材を通して多くのスポーツ選手と信頼関係があり、あらゆるスポーツの最新情報にアンテナを張って準備を整えているので、実現する日も遠くないだろう。

「学生時代の志望とは異なる道を歩み、組織の制約などで思うように物事が運ばない時期もありましたが、与えられたことに手は抜きませんでした。仕事というのは受け身にならなければ、充実してくるものだと思います」



## 草野氏の仕事を支える 「話す力」≦「準備する力」

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

草野氏は、NHKアナウンサーを経て、独立して30年。まさしく「話す力」で勝負し、第一線を歩み続けてきた。元々、人前で話すことは苦手、アナウンサー志望でもなかったと言うが、どのように話す力を身につけたのだろうか。

### 準備はやり過ぎることはない

インタビューしてわかったことは、話す力＝話す技術ではないということだ。

言うならば「準備する力」。

たとえばスポーツの実況のときには、「たて軸」と「よこ軸」で徹底的に下調べをする。100メートル走の実況ならば、競技に関する専門知識を深掘りするのが「たて軸」。短距離走に必要な筋肉に関心が湧いたとしたら、人種による筋肉構造の違いを調べてみるのが「よこ軸」である。そして、重要な数字（たとえば記録）はすべて暗記してしまうという。もちろん準備したことのうち、実際の実況で活かせるのは2割か3割にすぎないのだが、そのような準備をしているからこそ話に深みが出るのである。

草野氏自身はこのような準備の重要性を、NHKの先輩アナウンサーであり、『クイズ面白ゼミナール』などで知られる鈴木健二氏から学んだという。鈴木氏は、「準備というのは、いくらやってもやり過ぎることはない」と繰り返し語っていたようだ。

### 人と会う前の準備はおもてなし

人と会う前も準備である。「人と話をする前は可能な限り事前に下調べをし、相手と対等に話ができるように準備を入念に行う」という。草野氏はそれを新人時代の苦い経験から学んだ。

県知事にインタビューをしたとき、緊張のためにご機嫌をうかがうような取材になってしまい、視聴者からクレームが来たのだ。「話し方」を考えるうえで大きな教訓になったという。

日本には古くから「おもてなし」というサービス・マインドがある。おもてなしの原点は相手を想う心であり、「支度」という言葉で表現される。つまり人と会う前に、相手のことを思いながら、「あの人はどうしたら喜んでくれるだろう」と考えて準備することなのだ。

人と会う前に準備をすることは、おもてなしであり、相手に対する礼である。テクニックでうまく話すことを目指すよりも、準備を怠らないことが、「話す力」を身につける王道なのだ。草野氏は教えてくれる。

これならば、誰でも話すことの達人になれるそうだ。逆に言えば、「話し下手で……」というのは言い訳にならない。今回のインタビューでは、草野氏の考え方を事前に知ったので、かなりプレッシャーを感じた。徹底して調べてからインタビューに伺ったことは言うまでもない。